

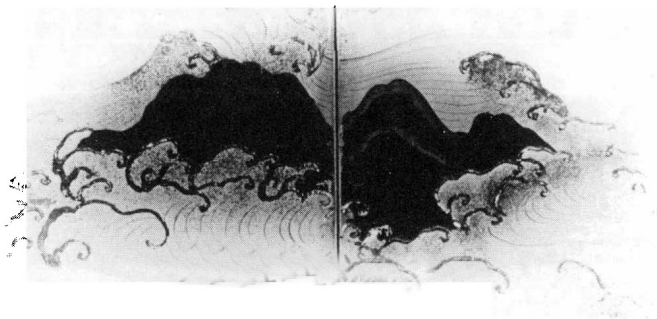
かくれ里

白濁正子

かくれ里

白洲正子

—口絵写真 野中昭夫—



新潮社版



かくれ里 ^{ざと} 白洲正子 ^{しらすまこ} 著 口絵写真 野中昭夫 ^{のなかあきお}
昭和四十六年十二月十日 発行
昭和五十二年一月十五日 十刷
東京都新宿区矢来町七一 新潮社 佐藤亮一 発行
電話業務部03(266)五二二編集部(266)五四二 振替東京四八〇八
金羊社 学術製版 半七印刷 新宿加藤製本
定価二五〇〇円

© 1971 Masako Shirasu Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

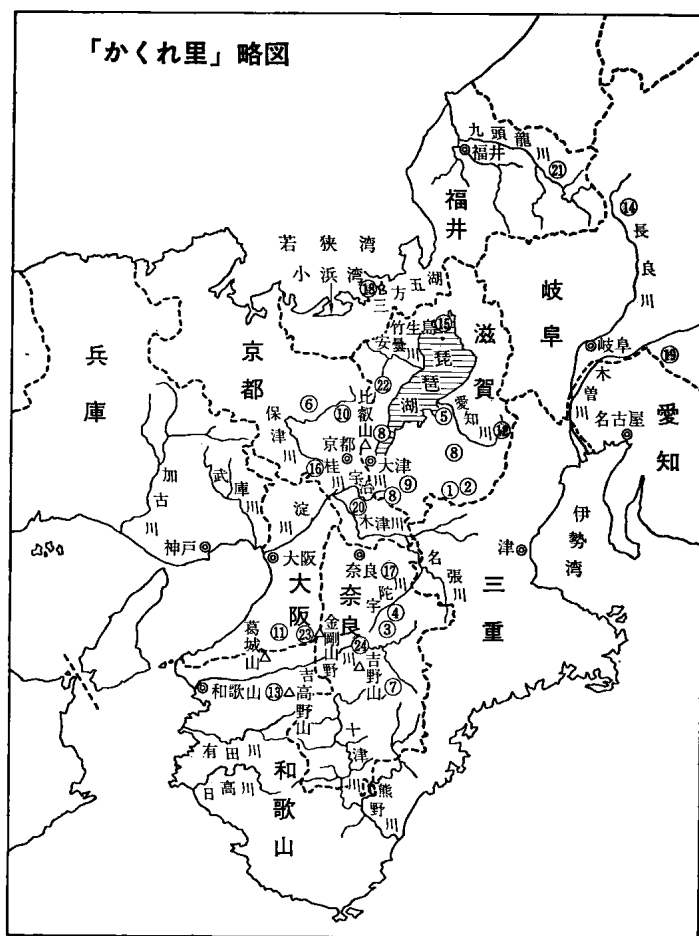
かくれ里
目次

油日の古面……………	7
油日から櫟野へ……………	18
宇陀の大蔵寺……………	27
薬草のふる里……………	38
石の寺……………	50
桜の寺……………	62
吉野の川上……………	75
石をたずねて……………	86
金勝山をめぐる……………	101
山国の火祭……………	114
滝の畑……………	127
木地師の村……………	138
丹生都比売神社……………	150

長滝 白山神社	164
湖北 菅浦	177
西岩倉の金蔵寺	192
山村の円照寺	206
花をたずねて	221
久々利の里	233
田原の古道	248
越前 平泉寺	264
葛川 明王院	279
葛城のあたり	296
葛城から吉野へ	312
あとがき	329

か
く
れ
里

「かくれ里」略図



- | | | | |
|----------|----------|---------|----------|
| ①油日の古面 | ②油日から樺野へ | ③宇陀の大蔵寺 | ④薬草のふる里 |
| ⑤石の寺 | ⑥桜の寺 | ⑦吉野の川上 | ⑧石をたずねて |
| ⑨金勝山をめぐる | ⑩山国の火祭 | ⑪滝の畑 | ⑫木地師の村 |
| ⑬丹生都比売神社 | ⑭長滝 白山神社 | ⑮湖北 菅浦 | ⑯西岩倉の金蔵寺 |
| ⑰山村の円照寺 | ⑱花をたずねて | ⑲久々利の里 | ⑳田原の古道 |
| ㉑越前 平泉寺 | ㉒葛川 明王院 | ㉓葛城のあたり | ㉔葛城から吉野へ |

油日の古面

「かくれ里」と題したのは、別に深い意味があるわけではない。字引をひいてみると、世を避けて隠れ忍ぶ村里、とあり、民族学の方では、山に住む神人が、冬の祭りなどに里へ現われ、鎮魂の舞を舞った後、いずこともなく去って行く山間の僻地をいう。謡曲で「行くへも知らずなりにけり」とか「失せにけり」というのは、皆そういう風習の名残りであろう。これから私が書くものには、いく分それに近い面もあるかも知れないが、秘境と呼ぶほど人里離れた山奥ではなく、ほんのちょっと街道筋から離れた所に、今でも「かくれ里」の名にふさわしいような、ひっそりとした真空地帯があり、そういう所を歩くのが、私は好きなのである。近頃のように道路が完備すると、旧街道ぞいの古い社やお寺は忘れられ、昔は賑やかだった宿場などもさびれて行く。どこもかしこも観光ブームで騒がしい今日、私に残されたのはそういう場所しかない。その意味では、たしかに「世を避けて隠れ忍ぶ村里」であり、現代の「かくれ里」といえよう。そのような所には、思いもかけず美しい美術品が、村人たちに守られてかくれていることがある。逆にどこかの展覧会で見て、ガラス越しの鑑賞にあきたらず、

山奥の寺まで追いかけて行ったこともある。時には間違つて別なお寺へ行つてしまい、意外なものに出会う時もある、といった工合で、そんな時私は、つくづく日本は広いと思うのである。さいわい私にはそちらの方面の仕事が多く、毎月のように取材に出るが、肝心の目的よりわき道へそれる方がおもしろくて、いつも編集者さんに迷惑をかける。が、お能には橋掛り、歌舞伎にも花道があるように、とかく人生は結果より、そこへ行きつくまでの道中の方に魅力があるようだ。これはそういう旅の途上で拾つたささやかな私の発見であり、手さぐりに摘んだ道草の記録である。

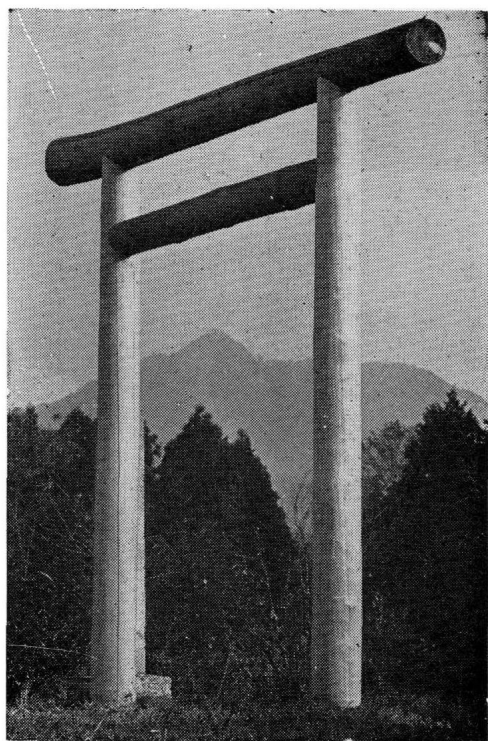
先日も京都から伊勢へ取材に行く途中、東海道の土山を通つた時、ついむらむらといつもの癖が出た。それは十年近くになるだろうか、京都の博物館で古面の展覧会があつた時、「福太夫」と名づける非常に美しい面を見た。油日神社蔵と記してあつた。土山の在、と聞くだけで、どんな神社かしらべてもみなかつたが、突然そのことを思い出したのである。むろん私はこのあたりの地理に詳しくはない。ただ、甲賀のあたりというだけで、その神社がどの辺にあるのか、だが地図を見ると幸いにも油日という駅がみつかった。国鉄草津線の小駅である。町や村は、近頃みな合併して、およそ無性格な名前に変わってしまったが、鉄道がこういう古い地名を残しておいてくれるのは有りがたい。たぶん駅で聞けばわかるだろうと、私は運転手さんに頼み、国道をそれて、西側の、旧道へ入つて行った。松並木の美しい、昔のままの街道である。高速道路やバイパスも結構だが、交通がはげしいだけでなく、その地方の住民の土地にしみついた暮し、そういったものが少しも見られないのが寂しい。東名でも名神でも同じである。ところが一步横道へそれると、家あり田あり畠ありで、身近に人間の匂い



福太夫の面(油日神社蔵)

がただよう。これは観光ブームのお寺についてもいえることだろう。バスから押し出される観光客は、信仰とも鑑賞とも、いや単なる見物からも程遠い人種に違いない。ただ隣の人が行くから行く、そんなうつらな顔つきで、いつてみれば、テレビや洗濯機を買うのとなんの変りもありはしない。しぜんお寺の方も抽象的な存在と化し、金もうけの機関としての役割しか果さない。気のせい、か、百済観音にも昔のような魅力はないし、中宮寺の如意輪も、近頃は色あせて見える。雰囲気や環境に左右されるのは、私の鑑識眼の至らぬ故もあるうが、絶対に左右されぬほど、人間は強いものではない。仏像や古美術も、強いものではない。それは不断の尊敬と愛情によって磨かれ、育ち、輝きを増す。特に日本のものの場合、その傾向がいちじるしい。

田舎の片隅に、人知れず建つ神社仏閣は、そういう点ではずっと生き生きしている。古美術のたぐいも、村人たちに大切にされて、安らかに息づいているように見える。油日神社は、私が思ったとおり、そういう杜の一つであった。駅前の通りを南へ少し行くと、大きな石の鳥居が現われる。まわりは見渡すかぎり肥沃な田畑で、鈴鹿の山麓に、こんな豊かな平野が展けているとは、今まで思ってもしなかった。南側の、鈴鹿山脈のつづきには、田圃をへだてて油日岳が、堂々とした姿を見せている。神山というのは、たとえば大和の三輪、近江の三上山みかみといったように、あまり高くはないけれども、何か共通の美しさと神秘性を備えており、遠くからでもすぐそれとわかる。この山に面して、田圃の中に小さな鳥居が立っているのは、「神田」を示しているのだろう。そういう所にも、信仰が生きているのが感じられるが、先に記した福太夫の面も、ここでの田遊びに使われたのだろうか。やがて深い木立にかこまれた神社が見えて来た。しつとりと、落着きのあるたたずまいで、後で聞いた話では、



油日岳と神田の鳥居

永禄九年（一五六六）の建造であるとか。参道には、桜の並木がつづき、盛りの頃はさぞかしと思いやられる。ちょうど宮司さんも御在宅で、さっそく例の面を見せて下さる。変にもったいぶらない所も、私には有りがたかった。

面は、写真にのせたので、よいな説明はほぶきたい。ごらん通りの美しい作である。正しくは、「田作福太夫神ノ

面」といい、永正五年（一五〇八）六月十八日桜宮聖出雲作の墨銘がある。手にとった触感といい、ほのかに残る彩色といい、近くで見るとひとしお美しい。裏面の彫りも見事である。この単純で、力強い彫刻は、決して片田舎の農民芸術ではなく、最高の技術を持った名工の作に違いない。だが、私の知るかぎりでは、桜宮聖出雲なる人物は不明で、桜が多い所を見ると、もしかすると桜の宮は、この神社の別名であったかも知れず、当社に所属した面打ちだったかも知からない。が、おそらくそれは伊勢の桜の宮（朝熊神社）であろう。すぐ目の前の鈴鹿を越えればもう伊勢の国で、甲賀の山村より、伊

勢の方が、文化ははるかに優れていた。ついでのことに書いておくと、この神社の祭神は、油日岳を象徴する「^{たけの}岳大明神」であるが、同時に罔象女（^{みづはらめ}水の神）と、猿田彦も祀られており、後者は断わるまでもなく、伊勢出身の神である。

また、ここに記してある「田作」の名称は、田遊びもしくは田楽の面であることを語っており、能面の研究家中村保雄氏のお話によると、宝生流の山姥^{やまうば}ほか、二、三現存の能面に、田作の銘が見られるという。山姥は、山に住む神人であったから、時々里へ下りて来ては、豊饒を祈る舞など舞い、行くえも知れず失せたのであろう。目の前に^{たたな}置わる鈴鹿の連山を眺めていると、私の中に祖先の思い出



公良面楽伎

が、ふと甦るおもいがする。その山人の舞が後に芸能化して、「山めぐり」する山姥の曲に成長したわけだが、能面にはいろいろな種類の古面が取入れられており、この福太夫も、もしお能に用いられていたら、とうの昔に有名になっていたに違いない。幸か不幸か、そういうことにならなかったのは、「神ノ面」として、村の人々に神聖視され、大切にされたからだろう。たしかにこの面には、犯しがたい気品があり、後世の能面に見られるような、陰鬱な表情はなく、大陸風とでもいい

たいほどの明朗な感じを備えている。これはどこから来たものか。どこかで私は、これに似た面を見たような気がする。何かに似ている。何に似ているのだろう。私は長い間——実は昨日の晩までそのことを考えつづけていたのであるが、ようようのこと思い当った。伎楽面ギガクに似ているのだ。それも推古朝の呉公（ゴコウ又はクレノキミ）という伎楽面に。

挿絵にあげておくから、見ていただきたい。むろん推古と室町時代では、格がちがうし、作りもちがう。だが、その凜然とした風貌は、ほとんど瓜二つといたいくらいで、これは偶然ではあるまい。偶然というには、全体のおおらかな印象を、的確につかみすぎている。伎楽はおそらくギリシャから西域を経て、中国に渡り、朝鮮経由で、七世紀の頃、日本に将来された芸能だが、外国では滅びてしまったその伝統が、日本の片田舎にこうして生き残っていることに私は、不思議な宿命を感じた。そういう意味では、日本の国そのものが、世界のかくれ里的存在といえるのではないだろうか。我田引水でいうのではない、彫刻でも陶器でも、私たちは外国から習い、習っている間に、独自の形を創り上げて行った。世界的な視野に立てば、それは地球の片隅にある小さな国の、一地方的民芸にすぎないかも知れない。が、メキシコやアフリカの土人の民芸とは違うのである。一つ間違えば物に墮す、その危うい所に立っているのが日本の美術品で、その所にむつかしさもおもしろさもあると、私などは思っている。なぜ物に墮さなかったかと言えば、異常な好奇心と探求心をもって、外来の文化を吸収したからに他ならない。風通しがよかったのだ。このことは、いわゆる物好きの収集家を見れば、ひと目でわかることだろう。民芸は健康だ、素樸だと信じて、それ以外のものに見向きもしない人々の収集ほど不潔なものはない。健康だと、頭で信じて、その世界に閉じこもるからだ。